

猫の外部寄生虫（ノミ・ダニ）

ノミ

ノミは体長1～3mmですが、運動能力に優れており、驚異的なジャンプで動物に飛び移り、直ちに吸血を開始します。雌雄ともに吸血し、雌は動物の体表上で産卵を繰り返します。外に出る子はもちろん、室内飼育の子も、人や同居ペットが室内に持ち込むこともあり、油断できません。

ノミの寄生によって以下のような病害が起こります。

吸血による貧血

毛のツヤの消失

かゆみによるストレス

ノミの唾液による
アレルギー性皮膚炎

瓜実条虫(サナダムシ)症
による下痢

ひっかき傷が原因の
化膿性皮膚炎

・ノミの活動時期と予防時期

ノミは気温が13℃以上あれば活動可能で、吸血の機会を待っています。暖かくなってきた春先から秋にかけて駆虫を行います。

ダニ

ダニにはマダニ、疥癬（ショウセンコウヒゼンダニ）、ミミヒゼンダニなどの種類があります。

マダニは体長2～3mmの寄生虫で、吸血により害をもたらします。疥癬やミミヒゼンダニは感染力が強く、接触によって移ります。寄生すると強い痒みの原因となり、寄生部位を掻くことによる外傷も問題となります。

・ダニの活動時期と予防時期

ダニは5月～11月の間に発生することが多いですが、季節に関わらず1年を通して活動しているので、油断大敵です。生活環境に応じて、一年中の駆虫も必要になります。

外部寄生虫への対策

ノミ・ダニなどの外部寄生虫を防ぐお薬には飲み薬タイプと塗布薬タイプがあります。どちらも予防効果が高いのでおうちの子に合った方法を選んであげましょう。お薬の効果は約1ヶ月で、ノミ・ダニの活動時期(3月～12月)には、毎月1回の予防薬の使用を行います。

飲み薬のメリット

- ・シャンプーに影響されない
- ・皮膚の弱い子にも安心
- ・多頭飼育でも大丈夫



塗布薬のメリット

- ・飲み薬が苦手
- ・皮膚と被毛上に広がるので、体内にはほとんど吸収されない



猫の内部寄生虫

子猫の時には、親や環境から寄生虫をもらうことがあります。この寄生虫は10cmを超えるものから、顕微鏡で見なければ分からないものまで様々です。お腹の虫は症状が出にくいいため見過ごされがちです。定期的に便検査を行い、駆虫を行いましょう。

内部寄生虫の種類

主なものには線虫類（猫回虫、猫鉤虫など）、条虫類（瓜実条虫、猫条虫など）、原虫類（コクシジウム、ジアルジアなど）がいます。

感染

感染源である生物の捕食、感染動物の便への接触、ノミによる媒介、親猫からの乳汁・胎盤感染などにより起こります。



症状

主な症状は下痢、発育不良、嘔吐などです。

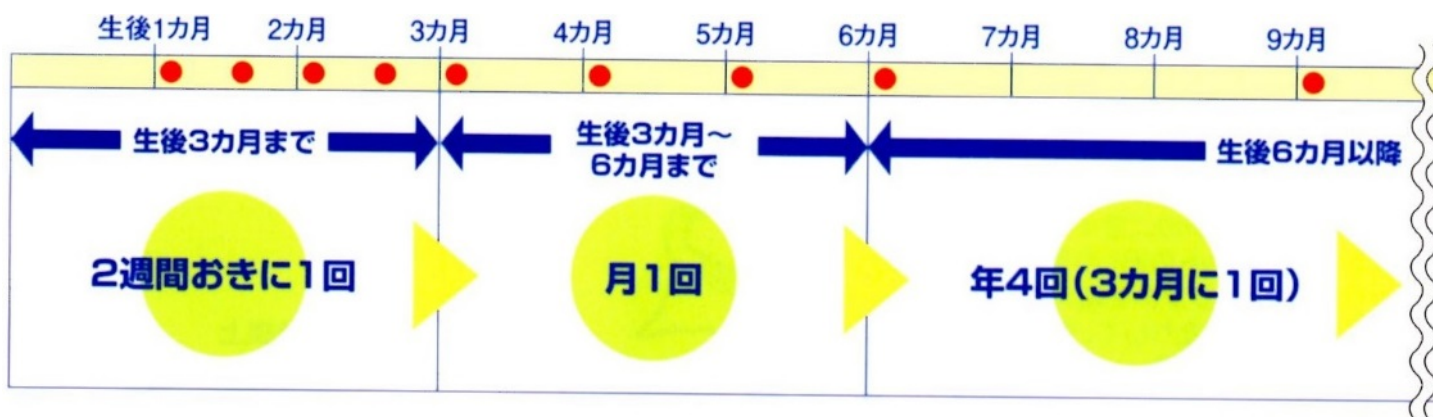
便検査と駆虫の必要性

感染の有無は便検査で調べます。便中に虫体や虫卵が見られれば感染は確実ですが、見られないからといって感染していないとはいえません。寄生虫にはプレパテントピリオドという、感染後に虫卵や幼虫を排出するまでの期間があり、その期間であれば便検査は陰性になります。

確実な駆虫のためには、定期的に駆虫することが必要です。

内部寄生虫への対策

当院ではアメリカ疾病予防センターやヨーロッパで組織された ESCCAP が提唱する年4回の定期駆虫を推奨しています。



駆虫薬については飲み薬と塗布薬があります。また、お薬によって駆虫できる寄生虫に違いがあるので、お薬の種類は獣医師とご相談ください。